

グアテマラ文化スポーツ大臣エクトル・エスコベド博士講演記録
「グアテマラ、古代マヤ都市エル・ペルー／ワカの考古学」

訳：中村誠一

中米のジャングルの中に奥深く隠れて、謎に満ちたマヤの廃墟となった都市は、それらを偶然発見した初期の探検家たちの驚嘆の的でした。いったい、これらの特異なピラミッドや宮殿群は、神が創造されたものなのか、それとも人間の手に成るものなのか、発見から 3 世紀の間、その謎は深まるばかりでした。しかし 19 世紀になって、画家、写真家、そして考古学者が、失われた都市の全体像をつなぎ合わせるようになると、科学的な事実がロマンチックな想像にとってかわり、マヤ文明の真実といかにしてこれらの精巧な遺跡が建設されたのかについて、ついに明らかにされるようになったのです。

アメリカ大陸に最初的人类が到達したのは、少なくとも 2 万年前のことであると考えられています。この時期には、ベーリング海峡に氷床が出現しシベリアからアラスカへ徒歩で渡ることが出来たといわれています。旧世界の歴史と比べるとアメリカ大陸の歴史は比較的新しく、基本的にアメリカ大陸の文化は、旧大陸からは孤立して発展しました。しかしマヤの芸術と東南アジアの芸術との間に、時にはいくつかの当惑させるような類似性が見られます。これらの類似性がなぜ見られるのかという点ですが、新旧両大陸の文化の間に海をわたっての接触があったというよりも、似通った環境、併行的な歴史（あるいは進化段階）、人間の精神や知性の制約といった側面による類似性の発現だと思われます。古代文明の進化において、熱帯雨林という環境下で複雑社会が独自に興ったという事例は、カンボジアのクメールとアメリカ大陸のマヤの二例しかないことは、言及する価値があることです。

アメリカ大陸の先住民たちは、数千年にわたる移動生活ののち、紀元前 2000 年頃から一般的な意味での、定住生活を行うようになりました。これが、文明とよばれる十分に複雑化した社会が創造されるための前提条件です。「メソアメリカ」という言葉は、メキシコの中南部、グアテマラ、ベリーズ、エル・サルバドル、そしてホンジュラス、ニカラグア、コスタリカの一部を含む文明地帯を呼ぶのに、パウル・キルヒホフによって最初に使われました。この広大な文化領域の中では、その歴史を通して（メソアメリカの）境界はかわり、メソアメリカの均質性は変化していきました。しかしその相違にも関わらず、メソアメリカ諸文明は、経済的な観点であれ、芸術的、宗教的、知的な側面からであれ、地域に統一性を与える一定の共通した特徴を有しています。

マヤ文明の領域はメソアメリカの東南部をカバーし、メキシコの東南部（ユカタン半島とチアパス州）、ベリーズ、グアテマラ、そしてエル・サルバドルとホンジュラスの西部

を含む 12 万 5 千平方マイルを越す範囲に広がっています。その領域は、少なくとも 3 つの主要な地域に分割され、それぞれの地域は独自の地形・生態系や歴史的な発展によりそれぞれ特徴付けられています。

- 1) 太平洋岸とグアテマラおよびエル・サルバドルの高地
- 2) 中米で最大の熱帯雨林が広がる中部低地および南部低地
- 3) ユカタン半島の北部低地

マヤ文明の文化史は、紀元前 2000 年から紀元後 300 年に相当する先古典期または形成期、紀元後 300 年から 900 年に相当する古典期、紀元後 900 年から 1542 年に相当する後古典期という 3 つの大きな時代に区分され、各時代はそれぞれ前期と後期の二つに区分されています。時には、これらの時代は、さらに原古典期、古典期終末期、原歴史期というような短い時代に細分されることもあります。古典期は、しばしば、幾分誇張されていますが、マヤの「黄金期」と呼ばれています。新大陸においてこの「古典期」という用語は、古代ギリシャ、ローマ文化の絶頂期を意味するのに使われた用語を採用したもので、彫刻、壁画といった多少なりとも普遍的な、形の残るマヤ芸術の全盛期という含意をもっています。音楽や舞踊といったその他の無形の文化はここでは考慮されていません。

マヤ人たちはメソアメリカだけではなく、古代世界でももっとも進んだ文明の一つを生み出しました。支配者層の政治経済的権力を補強するものであったマヤの高文化は、1 千年以上の間、成長し、発展しました。宮廷は、明らかに紀元後 300 年頃の古典期の初めに成立しましたが、その後も数百年の間、いわゆる「古典期文明の崩壊」とよばれる破滅的な状態の出現まで進歩しつづけたのです。この（古典期文明の）崩壊と呼ばれる現象は、最初にペテシュバトゥン地域ではじまり、やがて紀元後 850 年から 900 年までには、突然の社会の再編成と（都市の）放棄というパターンで南部低地を席卷しました。数多くの巨大な古典期の都市が荒れはて、いくつかの知的な慣行（例えば長期暦を刻んだ石碑の建立、マヤ碑文の彫刻、など）は、もはや紀元後 900 年から 1542 年の後古典期においては、行われませんでした。真に先コロンブス期の現象としては、マヤ文明は 16 世紀にスペイン人征服者たちの到来によって幕を閉じました。マヤの人々は、征服時には虐殺の対象となり、到来したヨーロッパ人（スペイン人）たちによってもたらされた感染症の被害者になりました。その結果、全体の人口は大きく減少し、いくつかの場所では 50% 以上もの人口減少が見られました。それにもかかわらず、マヤ人たちは、このような逆境を賞賛すべき不屈さで生き延びてきました。今日、都市や都会に住む人々の数は次第に増加していますが、依然として、800 万人を超える人々が、28 に及ぶマヤ諸語の一つを話し、村や村落共同体に住んでいます。マヤの人々は、現在、グアテマラを含む、古代における彼らの故郷の地をカ

バーする現代国家の中で相応しい地位を獲得するために確固たる政治闘争を繰り広げています。

様々な種類におよぶ滋養に富んだ穀物であるトウモロコシの栽培を基礎に、マヤ人たちは、先行するメソアメリカのその他の文明（オルメカ、サポテカなど）の文化的な業績をより精緻なものとし、具体化していきました。マヤ人たちは、鉄、ものを運ぶ家畜、実用化された車輪を持っていなかったにもかかわらず、メソアメリカにおいて模範的な建築家でした。彼らは、その存在が天と地のつながりを象徴している、そびえたつ神殿ピラミッドから、スペイン人征服者たちによってしばしば「宮殿」と呼ばれた王家の人々の住居まで様々なタイプの特徴的な建造物を造りました。それらは、みな荷に背負われ運ばれた石や土、粉にされ焼かれた地元の石灰岩から準備されたしっくいから造られました。芸術家たちは、鉄の道具なしで、石を整形したり、レリーフや碑文を彫ったりしたのです。

古代マヤ人たちは、また、約 800 からなる文字素や文字の組み合わせを通して、すべてのタイプの考えや言語を標記しうる、新世界でもっとも洗練された表語 - 表音表記法を発展させました。また彼らは、驚くべき正確さと複雑さを兼ね備えた暦、古代ギリシャ人やローマ人の間でも知られていなかった概念である 0 を含む 20 進法、そして石や見事な美しさを持った彩色土器に描かれた碑文を発達させました。支配者層によって指揮された階層化した社会構造の産物である、石碑や祭壇に刻まれた碑文の内容は、主に歴史的な事柄です。それらの碑文は、名前、出生、結婚、即位、戦争、戦争による敵対都市の高位の捕虜の確保といった、その都市の支配者の一生の主な出来事に焦点をあてています。またマヤの碑文は、神聖な場所における儀礼的なモノの奉納についても記録しています。

マヤの宗教は、基本的に、自然の力、また超自然の力や霊的実在を名づけし、崇拜し、統制することに焦点をあてて、何百年にもわたって発展しました。先古典期と古典期には、大地、空、死、トウモロコシ、そして稲妻というような自然の力は、超自然的な生き物あるいはシンボルという形で表現されましたが、そのイメージは、彼らがどのようにそれらの自然現象を具現化させたいかによって変化していました。これが後古典期（紀元 900 年以降）になると、そのイメージは固定化され、イメージの産物は人格を持つようになり、やがて階層的な神々の世界の一部を構成する普通の神格になっていきました。マヤの宗教において重要な儀礼の一つが、球技でした。この球技は、たんなるスポーツや見せ物ではなく、生と死、善と悪の力が戦うことを象徴する儀礼でした。球技で負けたものには、斬首という運命が待っていました。その極めて初期から、マヤの宗教において人身供犠は重要な役割を持っていました。生贄

と自己犠牲（訳者注；王や王妃が自分の血を流す儀式）は、自然、超自然の力に対して、雨、収穫、勝利、天体のバランスといったことを獲得するためになさなければならない捧げものだったのです。

以上のような概略（一般化）がマヤ文明の特徴ですが、個々の慣習や歴史における重要な変異を区別するには、個々の都市やその隣接都市の詳細な調査研究をしなければなりません。文明とは本来、社会的に異質で文化的に多様なものであり、古典期マヤについてより深く理解するためには、このような質の面を考証していく必要があります。この観点から、これからこの講演の主題である古代マヤ都市エル・ペルー/ワカの考古学に焦点をあてていきます。

位置

エル・ペルー/ワカ遺跡は規模的には中くらいですが、その魅力は、（遺跡に残された）すばらしい石造記念碑の質と量、そしてその遺跡を取り囲む熱帯ジャングルの景観でしょう。この遺跡は、グアテマラ共和国ペテン県の北西部に位置しており、サン・フアン川を見下ろす 100 メートルの高さをもつ断崖絶壁の上にあります。ここは、カヌーでの航行が可能な 80 キロの水系をもつサン・ペドロ・マルティル川との合流点の北 6 キロの地点にあたります。この遺跡へのアクセスは、時には困難ですが、乾季には現代のケクチ・マヤ語を話す人々の村落であるパソ・カバーヨスを拠点として、ペテン県の県都であるフローレスから未舗装の道を（四輪駆動車で）行くことも出来ます。雨季には、パソ・カバーヨスからサン・ペドロ・マルティル川を 15 キロボートで昇り、それから約 6 キロの小道をグアテマラ人類学歴史学研究所のキャンプ地を通りながら歩いて遺跡の入り口まで到達することができます。

エル・ペルー/ワカ考古学ゾーンは、マヤ生物圏保護区の中で最大のラグーナ・デ・ティグレ国立公園に位置しています。ラグーナ・デ・ティグレは、中米で最大の湿地帯で、コンゴウインコ、バク、ジャガー、黒ホエザル、ワニ、など、いくつかの絶滅危惧種を含む生物多様性が見られます。残念なことに、ここ数十年の間、農業や牧畜業が、また材木の採取が制限されずに行われてきたために、このエコシステムの大部分が政府の保全努力にもかかわらず破壊されてきています。

探検の歴史

ペテン北西部には、数多くの先史時代の集落址がありますが、考古学的には、事実上、未開の地といえます。事実、エル・ペルー/ワカの存在もこの地における石油の採掘により 1960 年代半ばまでには知られていましたが、その発見は決して公にされることはありませんでした。ペンシルバニア大学の院生であったロバート・クリスティ

が最初に遺跡を報告したのは、1970年のことです。しかしながら、最初の科学的な踏査は、クリスティのすぐあとに遺跡に到着したハーバード大学ピーボディ博物館のマヤ文字大全プロジェクト（訳者注；マヤ遺跡に残されたすべてのマヤ碑文の記録を残しデータベース化するプロジェクト）を指揮していたイアン・グラハムによって行われました。1970年から1997年の間に、グラハムと彼の同僚たちは、遺跡中心部の暫定地図を作成するために5度にわたり短期間の探検隊を組織し遺跡を調査しました。グラハムはエル・ペルー/ワカの記念碑の多くを作図することができ、盗掘家たちが不法に海外で売りさばこうとして、これらの彫刻のいくつかの表面を（伝動ノコギリなどで切って）持ち去ったことを報告しました。

2002年に南メソディスト大学のアメリカ人考古学者デイビッド・フリーデールの協力の下、私はエル・ペルー/ワカ考古学プロジェクトの共同ディレクターとして遺跡で初めて行われる学際的な調査研究に着手する機会を得ました。これは長期にわたるアメリカとグアテマラ、二国間のプロジェクトであり、この重要な都市が居住されていた間にどのような文化変化が起こったのかを明らかにする組織的な調査研究がいまでも行われています。さらに、我々はこの古代都市とマヤ低地のその他の同列都市、特にマヤ低地における二つの超大国とされる72キロ東に位置するティカルと108キロ北東に位置するカラクムルとのつながりや歴史を明らかにしたいと思っています。プロジェクトは、エル・ペルーといくつかの小さな二次遺跡の両方において、救済考古学、遺跡地図の作成、遺物の表面採集、ラボでの分析、広場、大規模な建造物、居住ユニットにおける深く掘り下げる発掘調査を実施してきました。

遺跡の記述

碑文の記録によれば、この遺跡の古代の名であるワカとは、「水の中のムカデの場所」という意味です。この時期には都市の中心に池があったようです。他のマヤ都市の多くと同じく、エル・ペルー/ワカは、経済的、政治的、行政的、宗教的機能を持っていました。（先に述べたように）居住地は、サン・フアン川の東岸に聳え立つ100メートルの高さの長い石灰岩の断崖絶壁の上に築かれました。その防衛的、かつ常時、水が入手できる立地にあるエル・ペルー/ワカは、要塞として使用されるのに適していました。サン・フアン川に沿った自然の船着場は、ペテン地方内陸部とウスマシタ地方を結ぶこの80キロに及ぶ穏やかな流れの川を（カヌーで）行き来する交易船の隊商を保護し、ここから発着することを可能にしています。古代のセントルメント・パターンや南北に伸びる尾根といった地形的なパターンからは、この水の豊富な地区を通して、ペテン地方を東南カムペチェ地方やカラクムルの本拠地へとつなぐ二次的な陸路の山越えルートが存在した可能性も示唆されています。このルートは7世紀には特に重要だったことが、カラクムルのユクノーム・チェーン大王が南部低地において

覇権的な支配域を強固なものにしようとした事からわかります。戦略的なクロスロードとして、エル・ペルー/ワカは南部低地マヤ文明の政治的、軍事的、交易的ダイナミクスにおける鍵を握る存在だったのです。

エル・ペルー/ワカの中核区域は、36ヘクタールにおよそ665の建造物が西側のセンターとミラドール・グループという二つの主要な建築複合とともに存在しています。西側のセンターには、4つの大きな広場を囲んで数多くの建造物があります。北と南を高くされたテラスで囲まれ、遺跡のこの区域へのアクセスは広場2に始まり、そこには12個の記念碑（すなわち、石碑の5番から12番と42番、そして雑多な石彫類と分類されているものの1番と2番）があります。そして、もっとも特徴的には、南東のアクロポリスあるいは建造物M13-1と分類されている、西側のセンターで最大の宗教的建築複合が、二つのテラスと、かつて石造の神殿がその上部に存在した中央のピラミッドとともに存在しています。遺跡の主要な広場である広場1には、古典期前期から後期にかけての日付をもつ22の記念碑（すなわち、石碑の18番から35番、40番、42番と祭壇の1番、2番）が、古典期後期の高い円錐状の埋葬ピラミッドである最大の建造物M12-32とともに存在します。中でももっとも特徴的な記念碑は石碑15であり、遺跡で西暦416年にあたる最古の碑文を有するとともに、ティカル、ワシヤクトゥン、リオ・アスールの碑文にも言及されているテオティワカンの戦士であるシヤフ・カクの到着について記録しています。広場4には、8つの記念碑（すなわち、石碑の36番から38番、祭壇3つ、2つの祭壇の支え）があり、球戯場、北西宮殿、一群の行政的建造物や支配者層の住居があります。

ミラドール・グループあるいは神殿アクロポリスと呼ばれる、エル・ペルーでもっとも際立った建築複合体は、中核区域の南東部に位置し、石碑1、（建造物O14-2およびO14-4と分類されている）二つの高いピラミッド、（建造物N14-12、N14-13、そしてO14-7と分類されている）三角グループを含み、断崖絶壁の上に位置しています。古代においては、最も高いピラミッドは、数キロはなれた先からでも見えたことでしょう。

先史

発掘とそこから回収された土器の分析により、先古典期後期から古典期終末期にあたる、紀元前200年から紀元後1000年にわたるおよそ1200年の居住シークエンスが明らかになりました。遺跡中核部の主要な広場において先古典期後期の終末に使われた土器が存在していた事実は、エル・ペルー/ワカがこの時期に一つの重要なマヤ王国の首都として出現したことを示しています。その時代の地方産の土器とペテン地方中部の同時代の土器の間に見られる類似は、エル・ペルー/ワカの初期居住民たちがペ

テン地方中部からやってきたことを示しています。エル・ミラドール盆地における先古典期後期の古代国家の崩壊というような地域の歴史的な出来事が、防衛的な断崖絶壁の上に築かれたエル・ペルーの設立に関係していたのかもしれませんが。そしてそこは、サン・ペドロ・マルティル川にそった、またその近くの交易を制御するのに理想的な立地であったわけです。

エル・ペルー/ワカは 40 以上の石灰岩の記念碑を有し、その碑文にはこの地の支配者と古代マヤ世界の最も重要な首都の王朝との間の歴史的な関係が記録されています。エル・ペルー/ワカの王たちは、紀元後 100 年から 800 年にあたる少なくとも 700 年にわたって 24 人が王位を継承した地方王朝でした。地方王朝は紀元前 100 年前後に創設されましたが、その歴史のうち最初の 200 年に関しては何も分かっていません。遺跡の最初の記念碑的建造物と彫刻された記念碑は、伝統的な中央ペテン様式で作られており、紀元後 250 年から 600 年にあたる古典期前期に奉納されました。碑文は 4 世紀頃の何人かの初期の支配者についての情報を記録しています。ミラドール・グループの建造物 O14-4 の内部で発見された埋葬 24 番はこの時期のもので、二人の若い支配者層の女性と胎児の遺体が埋葬されていました。西暦 378 年、キニチ・バラム一世の治世において、有名なテオティワカンの戦士であるシヤフ・カクがエル・ペルーに到着しましたが、それは、ティカルを征服しその遺跡で新しい王朝を設立するために東へと進軍を始める 8 日前のことでした。その結果、エル・ペルーはそれから 150 年以上の間、ティカルと密接なつながりを維持しました。古典期前期の最後のモニュメントは 554 年の年代をもち、それから約 100 年の間記念碑建立の中断期間があります。広場 1 における建造物 M12-32 の埋葬 37 番には、古典期前期から後期への移行期に生きたエル・ペルー/ワカの支配者の遺体が埋葬されていると思われます。

驚いたことに、その時代の彫刻された記念碑の多さのために、いわゆる（マヤ文明の）「黄金時代」である紀元後 600 年から 800 年の古典期後期は、エル・ペルー/ワカの考古学においては、少なくともこれまで発掘された地域においては、十分に実証されていません。古典期後期の初めにあたる墓である建造物 O14-4 で見つかった埋葬 39 番は、ティカルとのつながりを謳歌したエル・ペルー/ワカの最後の支配者の休息の場所であるのかもしれませんが。西暦 657 年に記念碑を建立する伝統は、再開しましたが、このときにはティカルの永遠の敵であるカラクムルの影響下にはいていました。カラクムルとの同盟を確固たるものとするために、キニチ・バラム二世は、カラクムルのユクノーム・チェーン大王の娘であるカビルと結婚したのです。北西宮殿に位置する王家の女性の墓である埋葬 8 番は、見たところこの時代に年代づけられるようです。ティカル王であるハサウ・チャン・カウィールは近隣の王国を征服するために軍事的な動きを開始しましたが、このことによって、西暦 695 年にカラクムルの帝國的

な野望が終わりました。西暦 743 年には、エル・ペルー/ワカの支配者であるバラム・ツァムが、ヤシャと呼ばれる衛星都市（訳者注；グアテマラ・ティカル東南のヤシャ＝ナクム＝ナランホ三角地帯のヤシャとは違う遺跡）において、ハサウ・チャン・カウィールの後継者であるイキン・チャン・カウィールによって打ち負かされました。そしてその都市の守護神の像が捕獲され、戦いの次の日にティカルへ送られたのです。少なくともあと 2 代にわたる地方支配者がいた証拠がありますが、彼らについてはほとんど何も知られていません。王朝最後の記念碑である石碑 24 と 25 は西暦 761 年に最後の地方支配者によって奉納されました。

紀元後 800 年から 900 年に当たる古典期終末期には、50 年におよぶ衰退ののち、記念碑的な建造物や広場が再度、建設されました。エル・ペルー/ワカにおいてこれまで調査されてきた区域で、（古典期終末期の指標である）薄手オレンジ式土器、薄手灰色式土器が見ついている点は、王家の宮廷が消滅してしまったのちの短期間の居住がこの都市の最後の居住であったことを示唆しています。しかしながら、我々は、その時期の居住が同じ人々によってなされたのかどうかについては、まだわかりません。エル・ペルー/ワカにおいて王家の宮廷があった時代から、古典期終末期にこの宮廷が別の政治システムへ取って代わられる変遷のプロセスについては、依然はっきりしていません。この時期にあたるものとしては、建造物 M13-1 の基壇の前や上の広場 2 の上部のレベルで見つかった終末儀礼と呼ばれる埋納品がありますが、これは、数多くの挽き石の破片、貝やヒスイで出来た高貴な品々、自己犠牲の儀式に使われた道具、フリント製の尖頭器、土偶、しっくい彫刻、人間の骨、10 万点をこえる土器の破片からなりたっています。

9 世紀に都市が放棄される直前に何度か暴力的な出来事があり、主要な歴史的記念碑が破壊され、その表面に彫られた支配者の像が打ちかけられました。その一方で、対照的に、これらの破壊された記念碑を修理しそれらを主要な広場に再度建立しようとする別の人々の試みもありました。記念碑の集合的な破壊は、王家の権力が衰退していくのを目撃した派閥間の社会内部の権力闘争が存在したことを示唆しています。

結論

これまでのことをまとめると、エル・ペルー/ワカの戦略的な立地は、この都市が政治的、宗教的、経済的な重要性をもつマヤセンターであったことを示しています。都市の立地は、中央ペテン地方の王国とウスマシタ川地域の王国を結ぶ古代マヤの交易ルートの中でももっともカヌーで航行しやすいものの一つと関連しています。それゆえ、エル・ペルー/ワカはサン・フアン川およびサン・ペドロ・マルティル川が合流する交易ルートと南部カムペチェ地方と中央ペテン地方を結ぶ南北に走る陸上の交

易ルートの両方を支配していました。

約 700 年の間、エル・ペルー/ワカの王たちは彼らの都市を、古典期前期、後期の両方の期間において、数千人の人口を有する印象的な都市センターおよび経済センターへと変形させました。彼らはまた、自分たちがティカルのシヤフカック、カラクムルのユクノーム・チェーン大王といった偉大な外国の王たちの従属王であるという証拠を残しました。エル・ペルー/ワカはこの二つのもっとも勢力の強かった古典期マヤ王国のために広大で戦略的な領域を支配しました。エル・ペルー/ワカは、動態的な歴史モザイクの中で、隣国と密接な交流をもっていました。今日こうやって私が皆様とそれを分かち合える榮譽をもちましたのも、考古学的な調査と碑文の解読のおかげなのであります。